

熊本県における銘柄米育成品種「ミナミニシキ」の栽培について

(第1報) 地域性からみた品種特性

岡村康博・坂井定義・伊藤延久

(熊本県農業試験場)

本県の産米実情をみると、品質面から指定銘柄品種がなく、耐病性の面からレイホウは T_2 型菌によるいもち病及びわい化病の罹病に問題があったため、ミナミニシキを昭和50年に奨励品種に採用した。この品種は熟期が晚いが、良質であるため銘柄米育成品種として、自主流通米生産地域を中心に安定栽培技術の確立を検討した。

1. 試験方法

試験は昭和48年から52年まで、球磨9ヵ所、山麓5ヵ所、準平坦7ヵ所及び平坦6ヵ所で実施した。供試品種はミナミニシキの他に標準品種レイホウ、比較品種トヨタマを供試し、その他の試験方法は奨励品種決定調査に準じた。

2. 試験結果及び考察

ミナミニシキは、レイホウやトヨタマに比べて出穂、成熟期が晚い。とくにミナミニシキは51年の山麓、球磨地域では低温障害がみられたため低温年次を考慮した場合、移植期の限界をきびしくみる必要があると考えられる。

品質については、全般的にミナミニシキは日本晴に近い上位等級率を示し、トヨタマと明らかな差がある。地域別にみると、第1表のように山麓、球磨及び準平坦地のような自主流通米生産地域は他の地域に比べ、ミナミニシキの上位等級率が高い。

食味については、第2表のようにミナミニシキが基準米レイホウより産地間、年次間の差がなく優れるため、評価は高く安定している。

ミナミニシキの収量性については、48～50年はレイホウより明らかに優れたが、51、52年はその逆の結果となった。これは T_2 型菌の発生の多少に起因するものとみられる。

ミナミニシキの耐病性については、葉、穂いもち病ともレイホウより発生は少ない。ただ葉いもち病の発生の割合には穂いもち病の発生は多くなく、穂いもち病のほ場抵抗性はあると考えられる。白葉枯病耐病性についてはレイホウ、トヨタマに比べ、発生程度が多く、予防のための防除が必要であるとみられる。耐倒伏性についてはミナミニシキが短秆であるため、問題はないものと考えられる。

3. むすび

ミナミニシキは、レイホウ、トヨタマに比べ品質、食味が優れ、いもち病にもかなり強く、特に自主流通米生産地域においてレイホウより優れる。ただ、晩熟であるため移植限界を守り、白葉枯病を防除する必要がある。53年度レイホウに代わって本県の特例銘柄に格付けされた。

第1表 ミナミニシキの地域別・年次別検査等級

項目 等級	地 域			年 次				
	山麓	準 平坦	平坦	48	49	50	51	52
1	1	0	0	1	0	0	0	0
2	7	2	1	4	1	5	0	0
3	32	17	14	13	24	16	7	3
4	6	3	6	1	1	3	8	2
5	2	0	0	0	0	0	2	0

注) 1. 数字は試験地の点数を示す。
2. 山麓は球磨を含む。

第2表 ミナミニシキの食味

産地 項目	昭和49年実施 (基準米：市販米)			昭和50年実施 (基準米：レイホウ)				
	農試	甲佐	南関	農試	甲佐	鹿本	七城	南関
外観	+	+	+	+	+	+		+
香り		+	+	+		+		
味	+	+	+	+	+	+	+	+
粘り	+		+		+			
硬さ				+		+	+	+
総評	+	+	+	+	+	+	+	+

注) +印は基準米と95%の信頼度で有意差があることを示す。